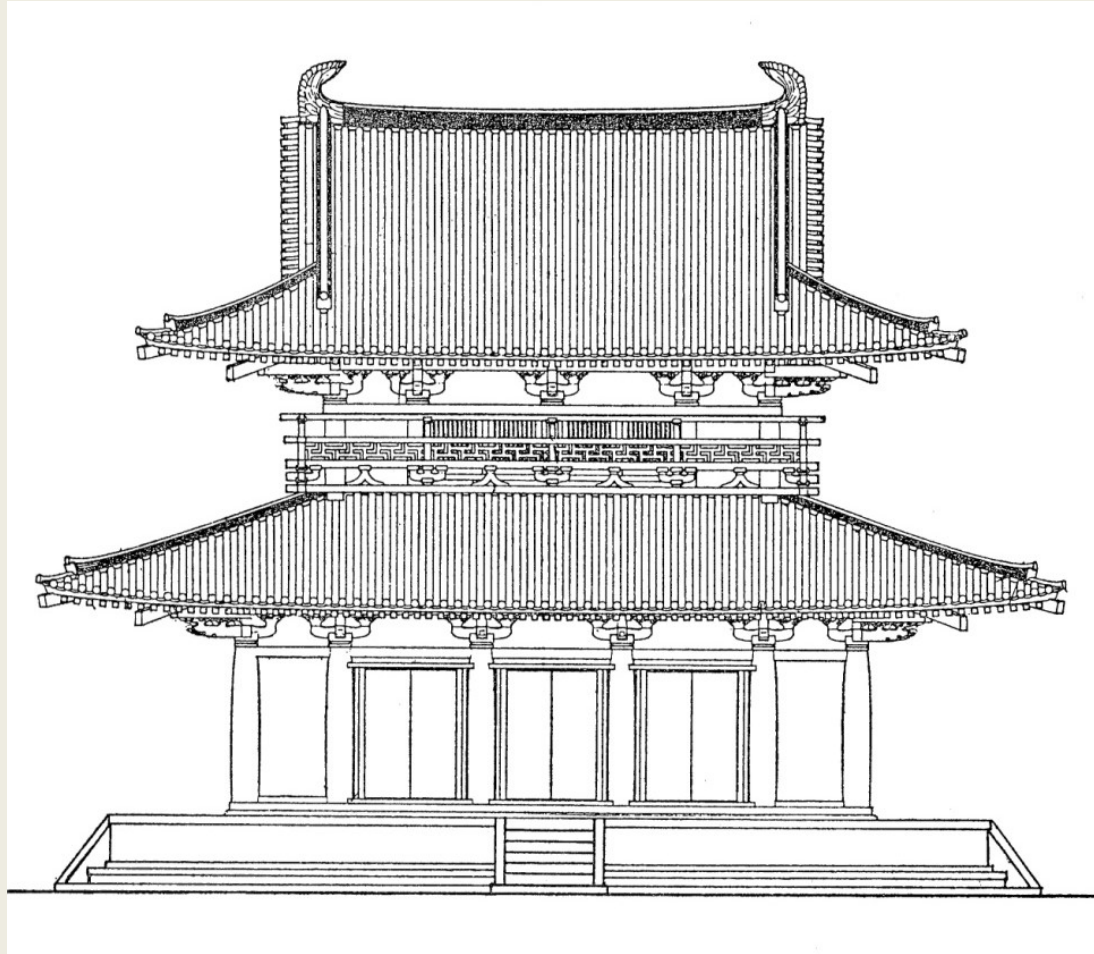


大学セミナーハウス 11月12日(日)

古田武彦記念古代史セミナー2023  
セッションⅠ 理系から見た  
「倭国から日本国へ」

法隆寺は太宰府法興寺の移築

川端俊一郎



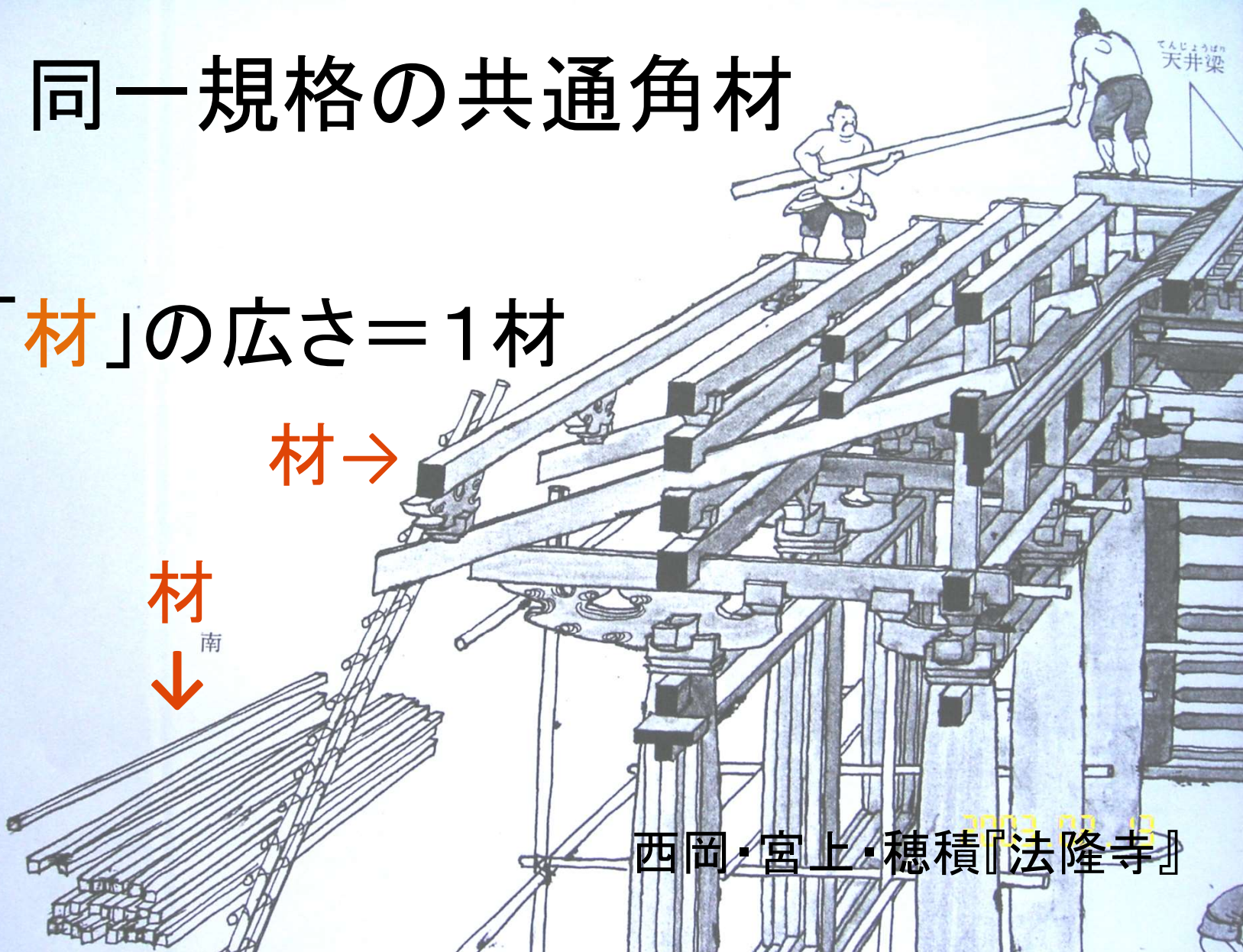
法興寺は中国南朝尺(245mm)の「材と分」で営造

# 同一規格の共通角材

「材」の広さ = 1材

材 →

材  
南  
↓



西岡・宮上・穂積『法隆寺』

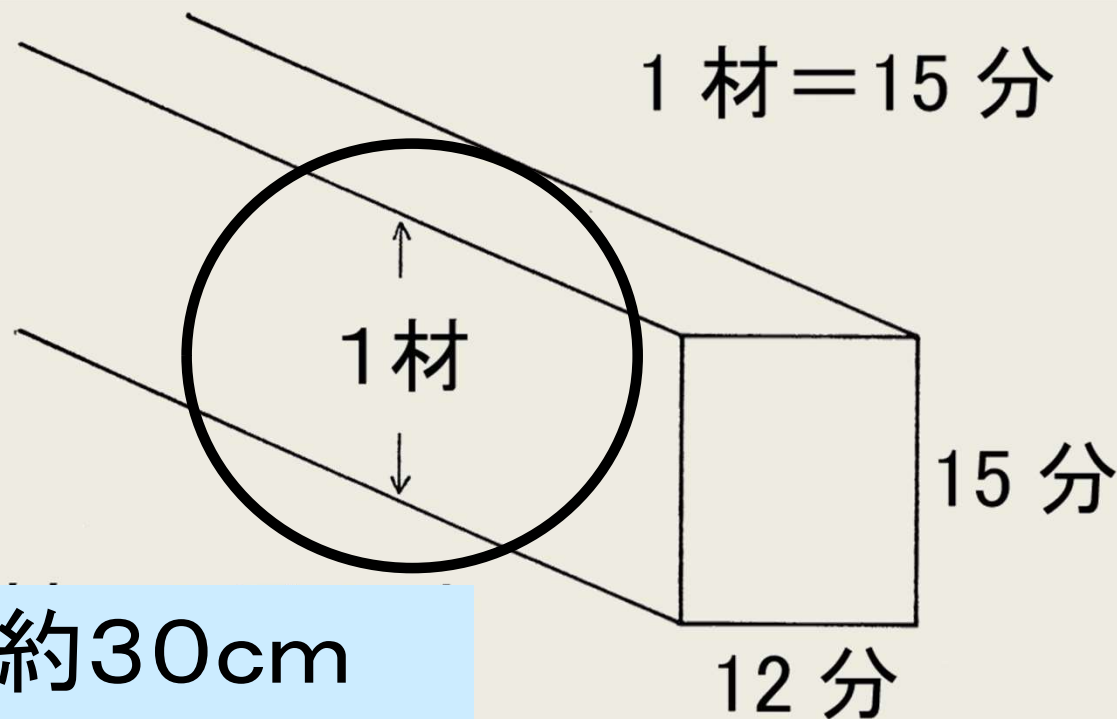
# 「材」に大小八等の規格

(摸数制度)

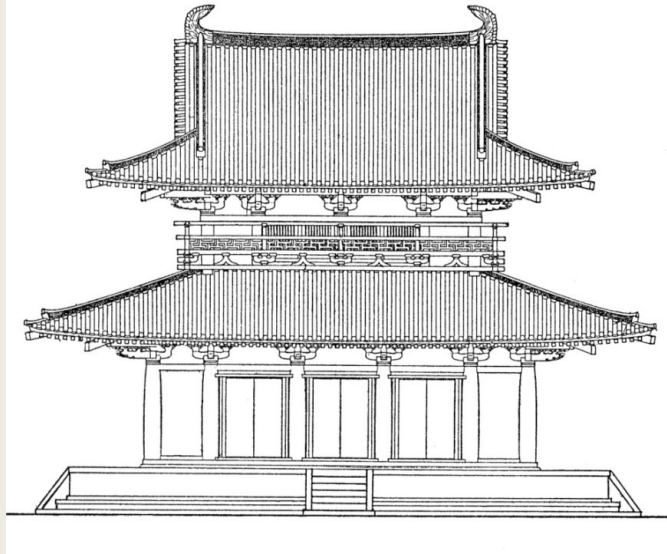
角材 = 方桁

「材有八等」

- 1等 1材 = 約30cm
- 2等 1材 = 約27cm
- 3等 1材 = 約24cm



法隆寺



金堂

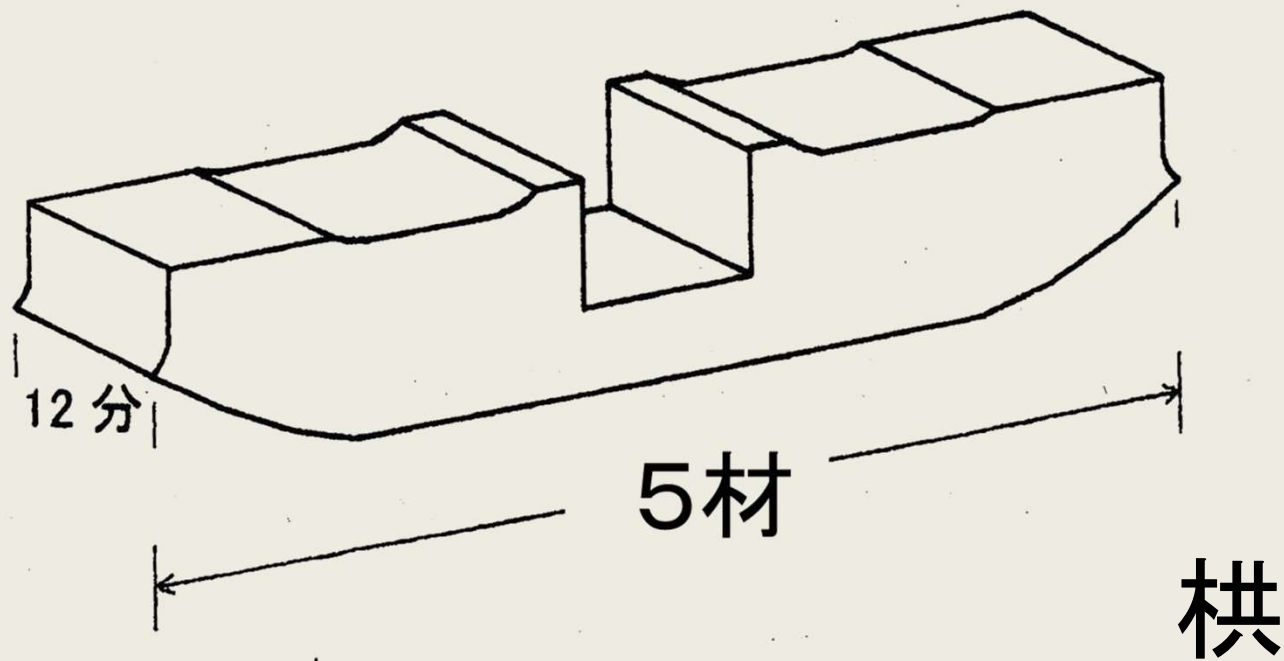
中央三間各12材 両脇8材 計52材

実測値 = 14,015mm 1材 = 269.5mm

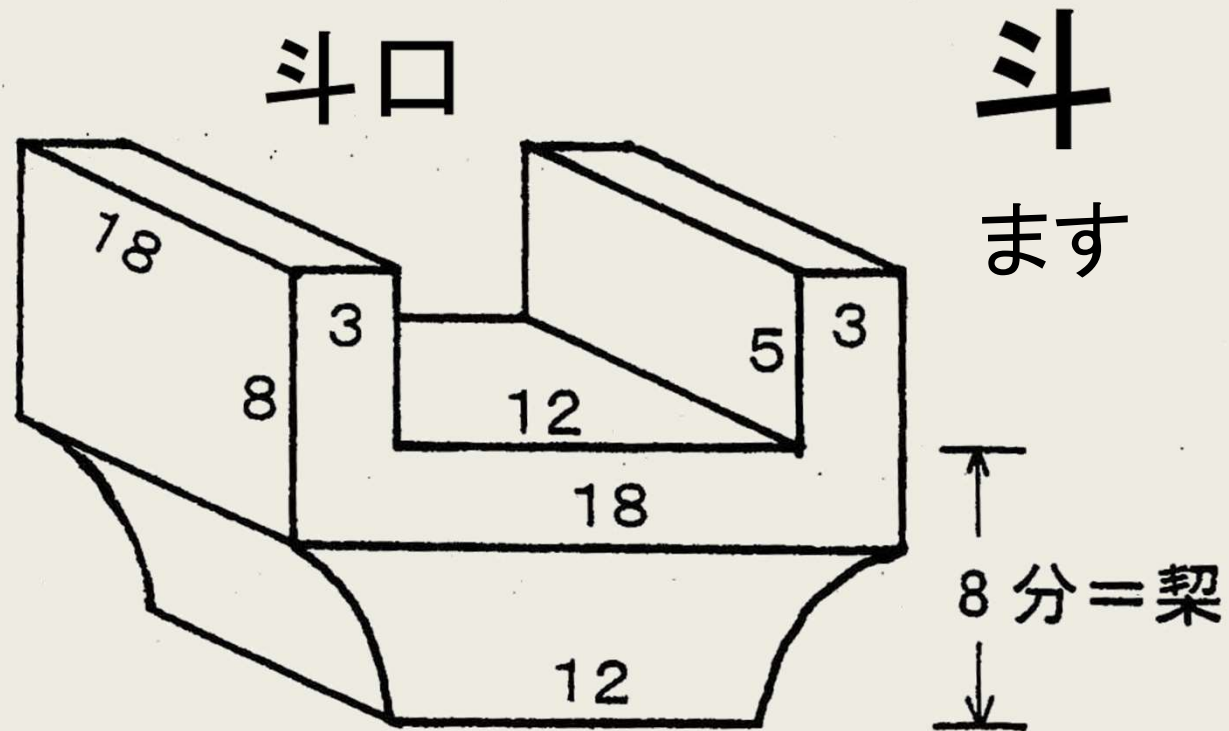
= 南朝尺 245mm + 24.5mm = 1尺1寸

南朝尺の二等材による南朝法式営造

# 肘木の長さは5材

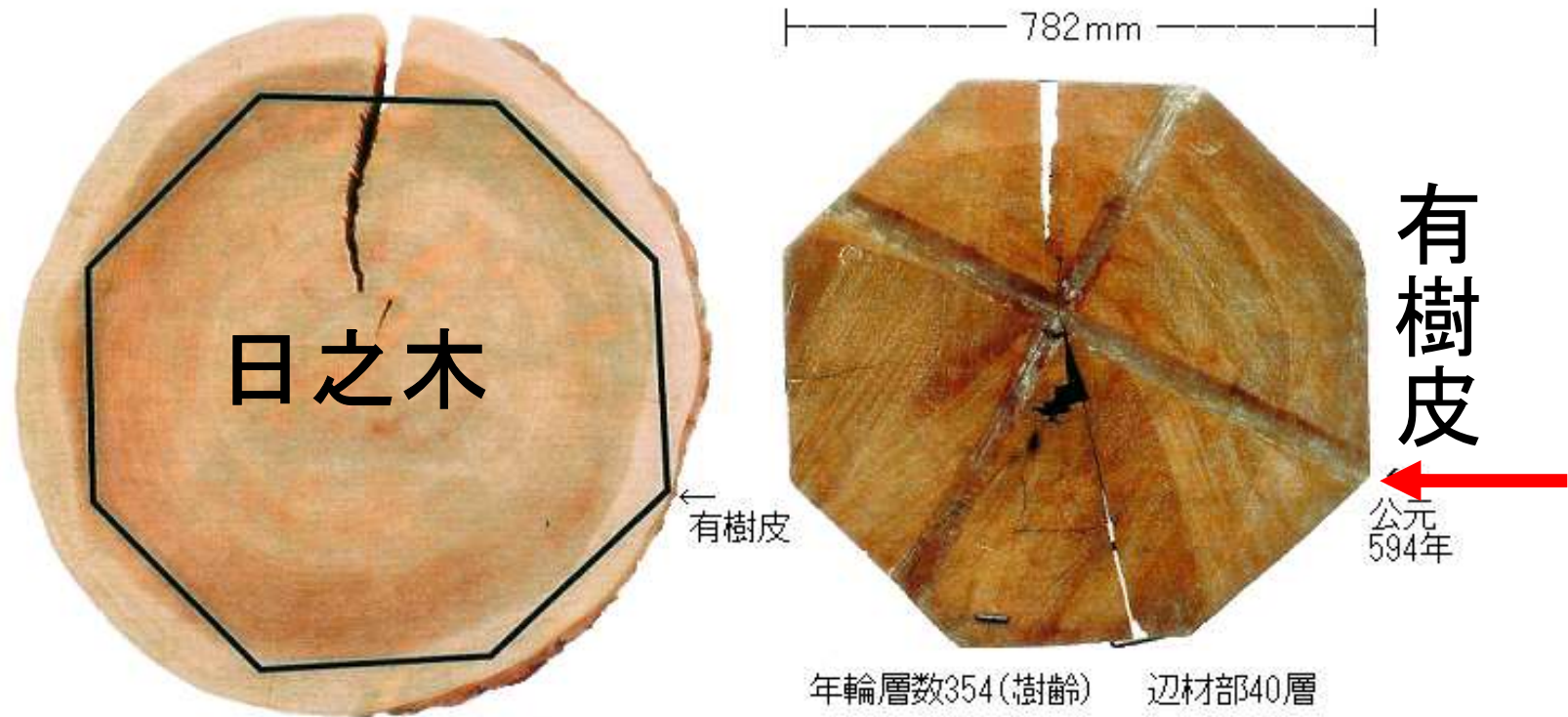


# ますの寸法は分きざみ



法隆寺

八角柱の高80材、下端径3材、上端2材  
高61材で繋ぐ凸凹の深さは8材



(光谷拓実、奈良文化財研究所、2001)



中国最古の南禅寺佛堂(厅堂法式)  
重修于唐建中3年(782年)

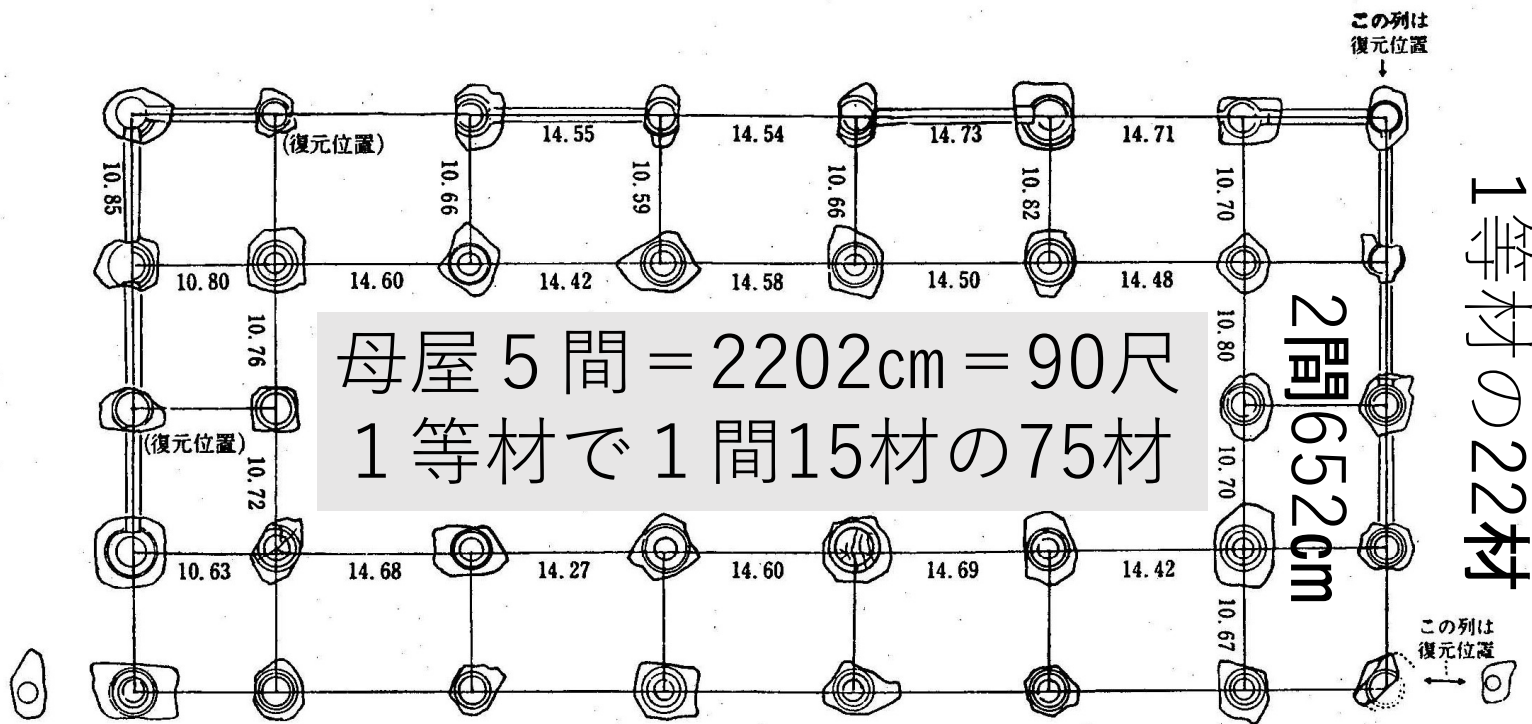
実測値

11  
62  
cm



# 太宰府政庁正殿

1等材 = 材広 1尺2寸 = 294mm



(鏡山猛『大宰府都城の研究』曲尺)。

## 太宰府では中国南朝尺(245mm)の「材」で営造

- 太宰府政庁正殿（間口7間・奥行5間）の礎石(柱)間隔は南朝尺の1等材（材広1尺2寸=29.4cm）の整数倍  
外周は礎石にズレあり、母屋正面の間口5間と奥行2間でみると間口5間の実測値(鏡山)は**2,202**cm、1間15材の5間75材は**2,205**cm  
奥行2間の実測値は**652**cm、1間11材の2間22材は**647**cm
- 法隆寺は太宰府法興寺の移築で、2等材1尺1寸で営造されている
- その移築跡に営造した観世音寺の旧講堂跡には現観世音寺の本堂  
そのため旧礎石の大半は失われたが部分的には復元(鏡山)  
旧講堂母屋5間の実測値は**2,333**cm、1間19尺の5間95尺は**2,328**cm  
奥行2間の実測値は**880**cm、1間18尺の2間36尺=**882**cm  
観世音寺の旧講堂は1尺丁度の3等材で営造された

# 法隆寺は太宰府法興寺の移築

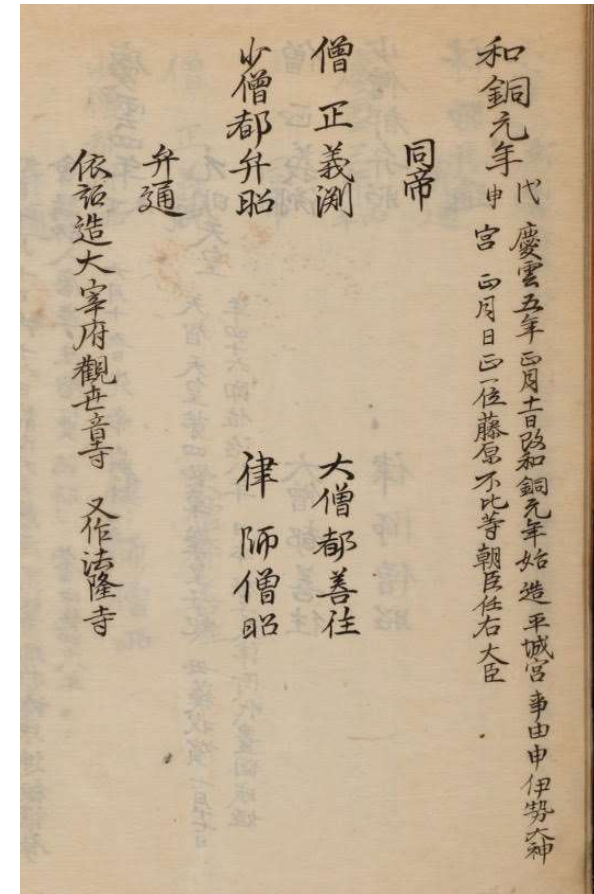
- 現法隆寺は、焼失(670)した法隆寺(607)の跡地に建っている(発掘1939)。
- 焼失法隆寺は四天王寺と同じ伽藍配置で、現法隆寺とは全く違っていた。四天王寺のように金堂と塔が南北に並ぶのは中国北朝圏にみられる。
- 2001年、法隆寺の塔の中心柱は594年の伐採と年輪年代法で断定された。そうすると現法隆寺は、新築の再建ではなく、古寺の移築であった。しかもその古寺は、厩戸皇子の焼失法隆寺よりも古い。
- その古寺は高名ながら、これまで所在不明の「法興寺」にほかならない。法興寺は上宮法皇(釈迦三尊光背銘)が、仏法興し元年(591)に起こした。法興寺は南朝が滅びた(589)あとでも、南朝尺の材と分とで営造された。法興寺は南朝を滅ぼした北朝隋との強気的外交を前に落成している。
- 南朝が滅び自立した倭国は「筑紫都督府」を天子の「太宰府」と改めた。上宮法皇の法興寺もその太宰府にあった。それがのちに移築される。

# (法興寺を移し)観世音寺を造り法隆寺を作る

七大寺年表(名古屋真福寺)にはただ和銅元年(708)「依詔造大宰府観世音寺 又作法隆寺」とあるのみ

上宮法皇の太宰府法興寺を解体して大和へ運び「東宮聖王」(本尊後刻)の焼失法隆寺の再建として組み上げた。

ただしその伽藍配置は他に類をみないものに変更されている。



## 法興寺の伽藍配置を抜本的に変更した法隆寺

- 法興寺(2等材)を解体し運び出した跡地には新たに観世音寺(3等材)が営造された。両寺の伽藍配置は相似であったろう。移築前の法興寺では、塔の西に金堂があって、本尊の釈迦如来は西のほうから仏舎利を納めた塔を見つめ、静謐な空間が作り出されていた。
- ところが移築後の再建法隆寺では、金堂は塔の西でなく東にあって南面するから、金堂の仏像はどれも塔ではなく、右前の四本柱の中門のほうを向いている。
- 移築法隆寺では、法興寺本尊の釈迦像をやはり金堂中央に置いた。しかしそれを薬師如来と呼ぶのは、焼失法隆寺の本尊が薬師像だったからである。そして釈迦像の光背裏に「造寺薬師像作」(607)の経緯を後刻してある。
- 移築金堂には本尊東隣にもうひとつ大きめの釈迦三尊像を置いた。その天蓋が鎌倉時代に落下したのを機に大小を入れ替えている。

法興寺本尊  
釈迦如来

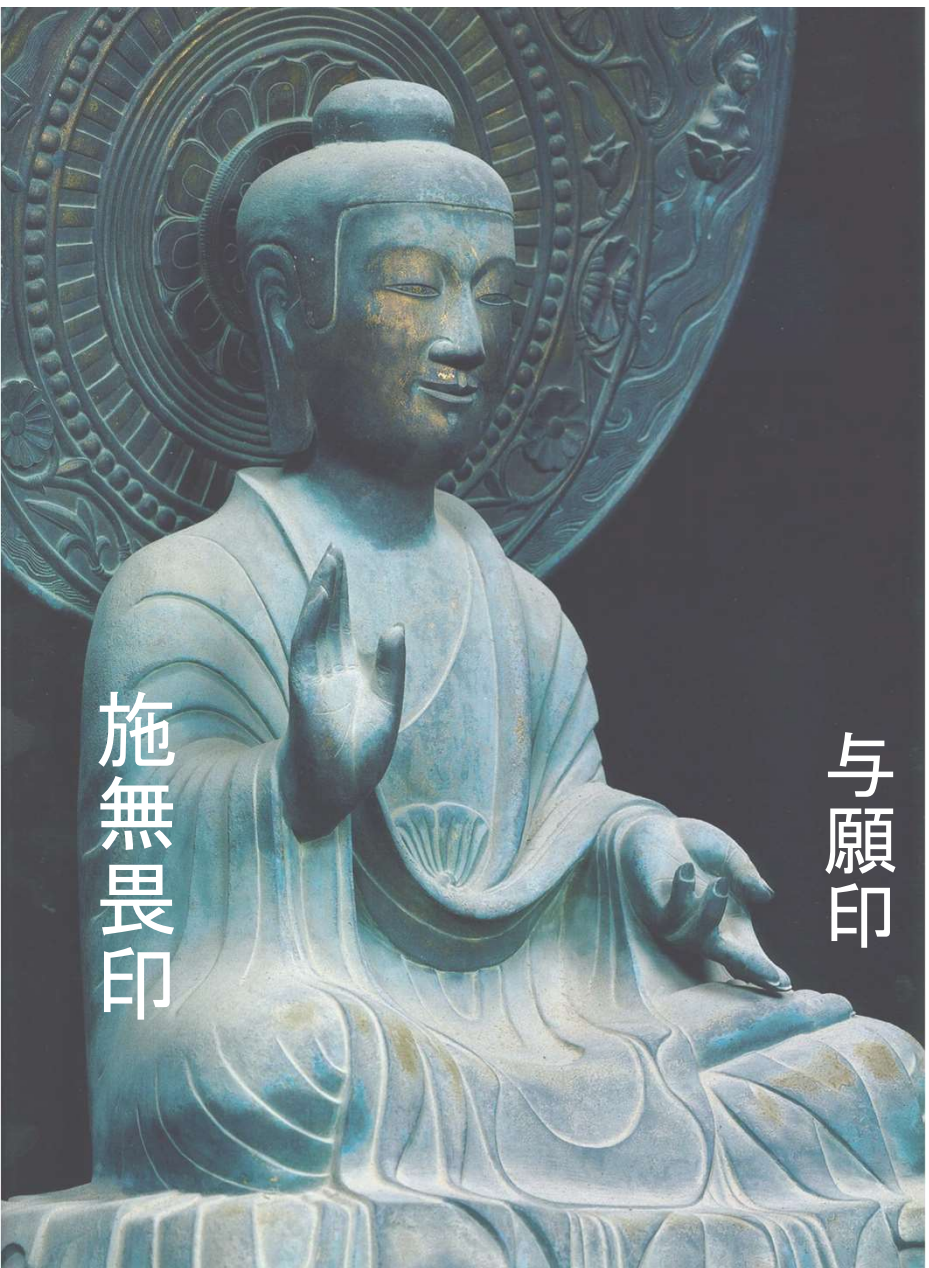
臨時  
上御堂

聖徳宗・根本本尊

法興寺根本本尊  
薬師如来



法興寺本尊  
釈迦像



与願印

施無畏印

法隆寺では薬師像と呼ぶ



本尊釈迦像(通称薬師像)

釈迦三尊像の釈迦



止利  
仏師  
造

Shakya's symbolic signs with the fingers 印相

Shaka  
triad  
通称  
釈迦三尊



上宮法皇の登遐後に敬造  
「釈迦尊像并侍」  
623年

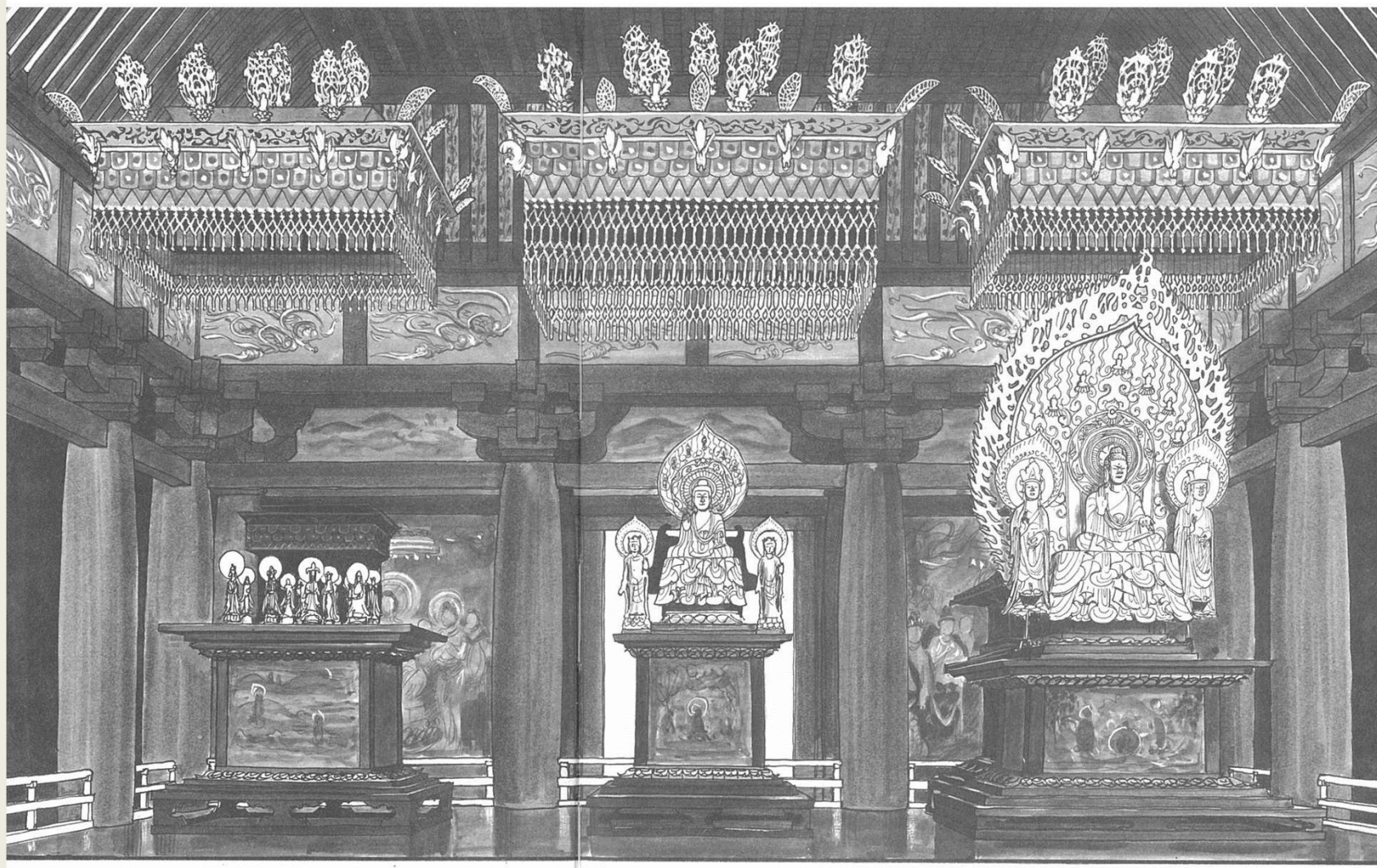


上御堂

釈迦三尊像は  
聖徳宗の本尊

## 移築で入れ替えられた仏像の悲哀

- 釈迦三尊像は、法興寺を創建した上宮法皇の急逝を悼み、その往登浄土を願って敬造されたのだから(623)、法興寺本尊の釈迦像を押しつけて安置することはない。それは別に八角仏堂を造って安置した。それが「夢殿」であった。
- ところが法興寺の移築のとき、その夢殿の釈迦三尊像は法隆寺の金堂に持ち込まれた。入れ替わりに法興寺金堂から持ち出して夢殿に封じ込められ秘仏とされたのは上宮法皇等身の観世音菩薩像、通称「救世観音」であった。(フェノロサによる救出は明治17年)
- この救世観音と対をなす王后等身の「百済観音」のほうは確かな身請け先に恵まれず、像の「起因は古記にもれたり」(江戸時代)の状況であった



鎌倉時代までの法隆寺金堂の仏像配置（西岡ほか『法隆寺』）  
右の釈迦三尊像光背に透かし彫りの飛天がまだ付いている



現在の仏像配置



手前が東の間

王后等身の百済観音



ともに九州特産クスノキの一木造り



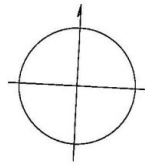
「上宮王等身観世音菩薩 救世観音



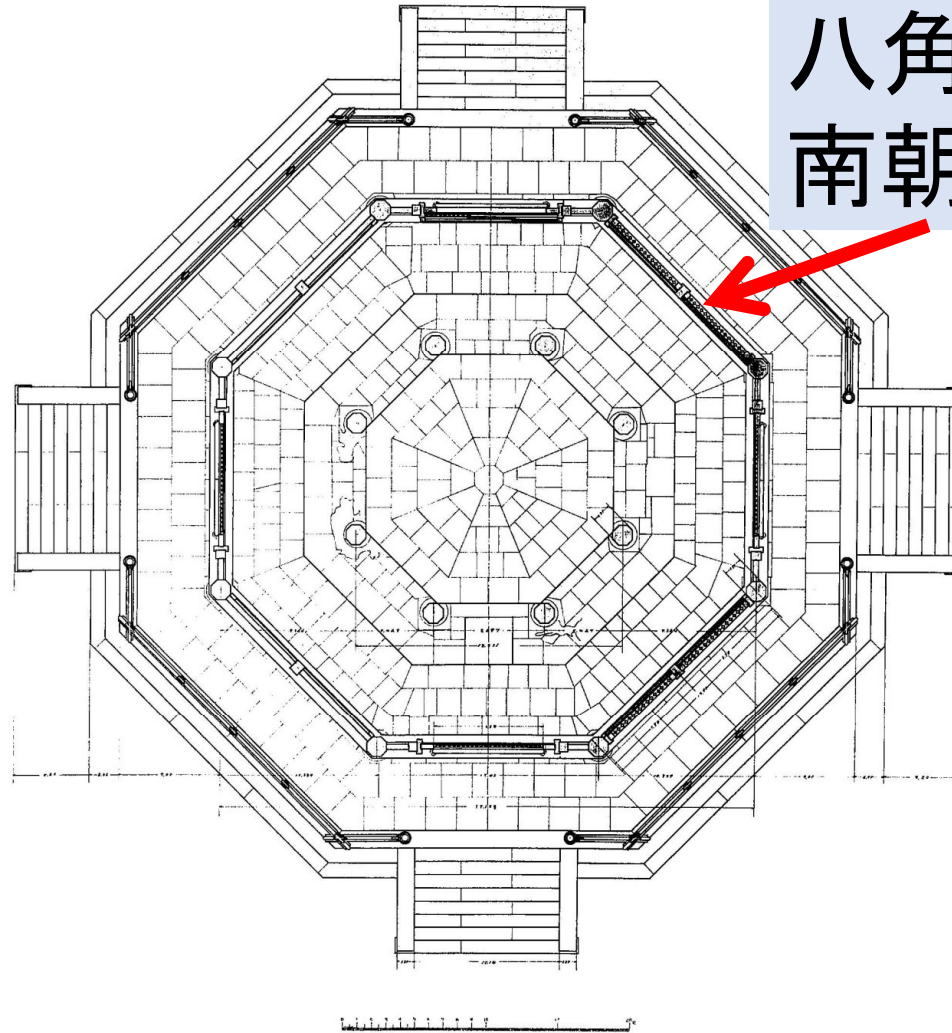


# 八角仏堂(夢殿)





夢殿平面図



八角の1辺  
南朝19尺



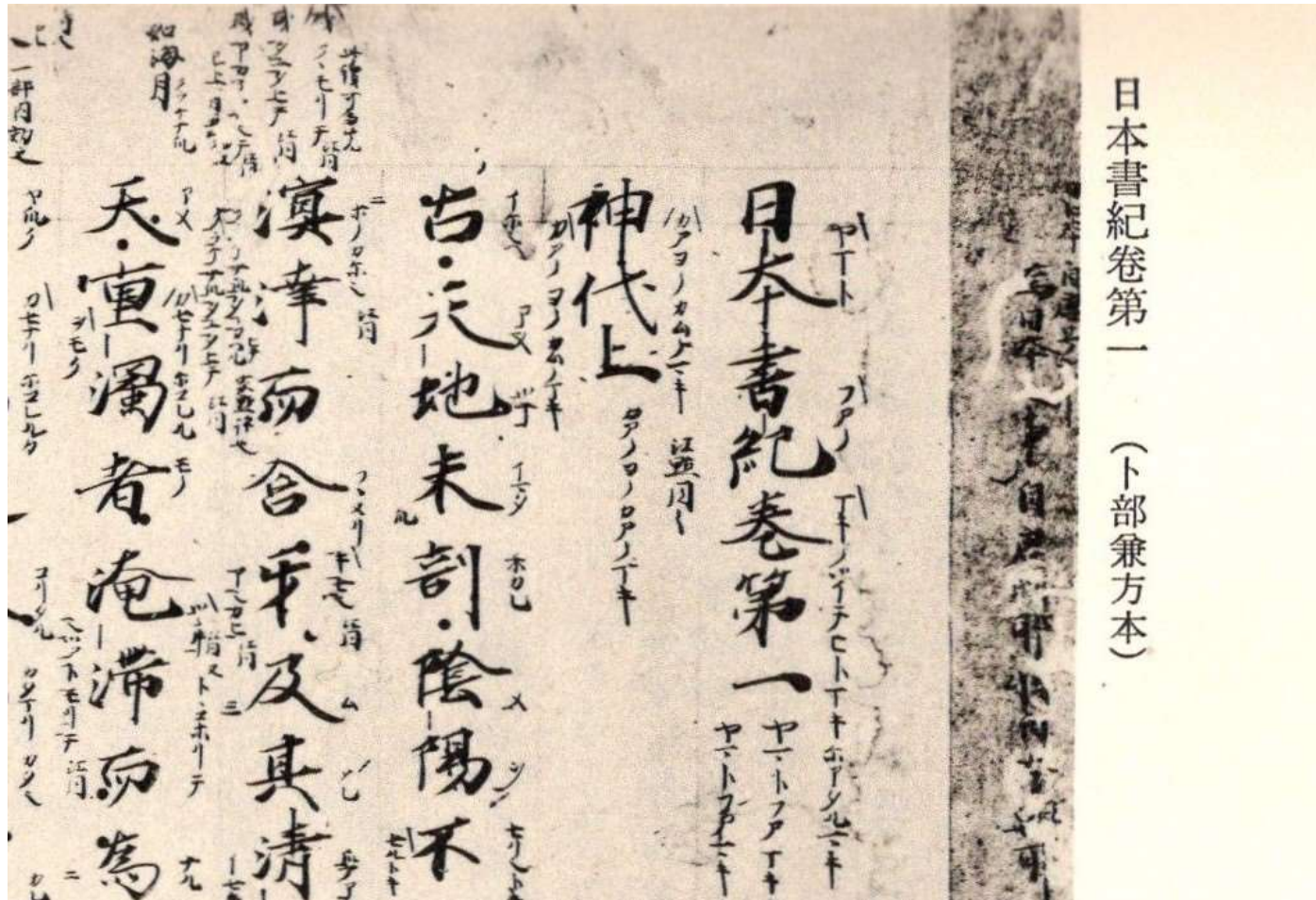
## 「倭から日本」の前に「委から倭」があった

- 金印(57)が「漢**委**奴国」なら漢書地理志(78)も「楽浪海中有**委**人」
- そして魏の金印(238)も「親魏**委**王」だ  
女王はそれを確かめて漢の金印を埋納した
- 広開土王碑(414)には「倭以辛卯年(391)来渡海破百残」云々
- 後漢書(426)も金印の委奴国を倭奴国と書く  
「建武中元二年(57)倭奴国奉貢朝賀・・賜以印綬」云々
- 旧唐書(945)に「倭国は古の倭奴国なり」とは金印の委奴国  
倭の字音は委と同じ「ヰ」、卑字として日本を指すと「ワ」
- その名の「不雅」をにくみ自ら「日本(ひのもと)」と改めた

# 「日の本」の国の「日の出」天子の「無条件降伏」

- 中国南朝が滅ぶと(589)、滅ぼした北朝の隋に遣使して(607)その国書に「日出処天子致書日没処天子」と、挑んだ。隋書(636)は日本改号にはとりあわず、ことさらに倭国伝の倭を倭に作る。
- 唐軍は白村の江で「四戦皆捷」(663)、「倭国酋長」は捕囚となる(旧唐書)。
- 泰山「封禪之礼」(666)に参列の「諸蕃」に倭国の酋長もいた(冊府元龜)。
- その倭国王の生還は天智紀の帰還者(671)に「筑紫君・薩野馬(サチヤメ)」
- 筑紫君こそは「白日別」(古事記)の末裔、まさに日の本の国のアマキミ筑紫(竹斯)の倭王の姓は「阿每(アメ)」号は「阿輩雞弥(アマキミ)」(隋書)
- 1917、太宰府天満宮で発見の翰苑(660)に「阿輩雞弥」は漢語の「天児」アマキミは始め天王、後に天皇と書き、国号も日の本と改めた。
- 敗戦後の新生日本(ヤマト)国では天皇号「アマキミ」が「スメラミコト」へ
- 玄宗皇帝の「勅日本国王 主明楽美御徳(スメラミコト)」とは(736)、号を王の名と解した。唐帝も高宗以来「天皇」と号した。

# 日本書紀はヤマト書紀



日本書紀卷第一 (下部兼方本)

# 日本(ひのもと)から日牟(ヤマト)へ

- 生還した筑紫君薩野馬は内乱を征し、大アマキミとして復権
- 唐軍の進駐を受けた筑紫から都を遷す「凡そ都城や宮室はひとつ処ではなく必ず兩つ參つは造るべきで先ずは難波に都する」(天武684)
- 唐の律令模倣の「新」律令が完成(701)、大宝と「改」元(続日本紀)
- 日の本旧記などみなヤマト中心に書き替え九州王朝は失われた
- 日本も「日牟」と書いて「日牟(ヤマト)書紀(フミ)」が成った(720)
- 写本で伝世した日牟書紀の「牟」の字を近代は「本」で活版印刷
- 新生「日牟(ヤマト)」で再出発の遣唐使粟田真人の説明難解か(702)  
旧唐書に「日本は旧小国で倭国之地を併せた」とある  
日本人の多くは自ら矜大「実を以てこたえず故に中国これを疑う」  
新唐書(1060)では、日本の「本」をみな「牟」と刻している
- 「日の本からヤマトへ」は「法興寺から法隆寺へ」とも重なる。